劇作家・演出家の永井愛さんが同窓生講演会
永井さんの人柄がわかる楽しいトークを満喫

日本を代表する劇作家・演出家である富士高校22回卒の永井愛さんをお招きして、2017年10月8日午後、なかのZERO小ホールで同窓生講演会が行われた。テーマは『芝居が教えてくれたもの』。永井さんの幼少・学生時代、下積み時代から現在に至るまでのエピソードの数々に、会場に集まった86人の卒業生と二兎社のファンは、笑い、共感し、引き込まれた。当日、永井さんの聞き手としてともに舞台に上がった同期の田端洋子がリポートする。

── どんな経緯で演劇の道に進むことになったのですか？

「幼稚園のお遊戯会で人前で表現することの楽しさを知りました。祖父母と、父、私の4人家族で、父も祖母もよくしゃべった。私も負けずに、その日の出来事を、いかにリアルに、受けるように話すかに心を砕いたことが人間表現の基礎を作ったのかもしれません」

「小学生のころからずっと役者になりたいと思っていましたが、中学生になってからはその気持ちを隠していました。富士高に入っても演劇を目指していることが言えなくて、まずテニス部に入りました。身近な友人がいることを知り、やっと演劇部に入ることができました。進路指導の先生にも言わなかったのですが、市原悦子さんに憧れ俳優座に入りたかったので桐朋学園芸術短期大学だけを受験して合格しました」

（略歴）
永井 愛（ながい・あい）氏
劇作家・演出家。二兎社主宰。桐朋学園芸術短期大学演劇専攻科卒。「言葉」や「習慣」「ジェンダー」「家族」「町」など、身辺や意識下に潜む問題をすくい上げ、現実の生活に直結した、ライブ感覚あふれる劇作を続けている。

「在学中に考えが変わり、卒業後、俳優座は受験せず前衛劇団の安部公房スタジオを受けたのですが不合格でした。家を出て阿佐ヶ谷にアパートを借り、23歳から、昼夜バイトをして演劇を目指しました。25歳で力尽き祖母の面倒をみるという口実で自宅に戻りました」

「その後、春秋団というグループに入ってやっと舞台に立ちました。そこで大石静に出会った。春秋団解散となり30歳を迎える年に『兎たちのバラード』で、兎年二人の劇団『二兎社』を旗揚げました。二人で決めたことは、『背伸びはよそう。自分達が普段使っている言葉で、感じていることを表現しよう』でした。現実の生活に直結した、観る人を当事者にするような芝居を目指しました」

「二人が、作、演出、役者で舞台に立つ劇団として、再演含め20作品を上演しました。10年目に大石静が二兎社を卒業。私が二兎社を主宰することに。転機となったのは戦後生活史劇三部作の第一作目となる『時の物置』を書いたこと。次作『パパのデモクラシー』で出演をやめ、書くことと演出のみに集中しました。役者をやめたことはとても寂しかったのですが」

「役者になりたいと場を求め、自分で書くしかない、と結果的に消去法で道を決めてきたことになります。『パパのデモクラシー』以降、上演作品が文化庁芸術祭大賞、紀伊國屋演劇賞個人賞、読売演劇大賞優秀作品賞、岸田國士戯曲賞など数々の賞を受け、二兎社は劇団として認知されるようになりました」

── 「役者に向かない。やめた方がいい。お嫁さんになった方がいい」と言われても続けてこられたのは？

「そうは言っても、演劇の場でほめられた経験も少しはあったわけで、自分の中でまだやれるという気持ちをそういう記憶が支えてくれた。元来楽天的で計画を立てるのが苦手。行き当たりばったりで生きてきました。見通しの甘さと信念の強さでやってきて今があります（笑）」

── 芝居が教えてくれたものは？

「芝居に限らず仕事をしていると仕事が教えてくれるものがあると思う。本当に書きたいものを書くには勇気がいりますが、真剣にチャレンジしていると支持してくれる人、応援してくれる人が現れることを知りました」

質疑応答では、過去の公演の感想や、「贅沢な話が聞けて嬉しかった」などのコメントがあった。また、「大衆受けするものと自分が書きたいもの」「演出家と脚本家の関係」など興味深い質問も相次ぎ、永井さんの本音が聞けた。画家であった父の絵を公開するため『永井潔アトリエ館』を開館し奮闘中と聞いて、親しみが増した。永井さんを身近に感じ、今後の活躍に目が離せなくなった。次作『ザ・空気 ver.2 誰も書いてはならぬ』が楽しみだ。